

まえがき

自然とは何なのかをほんとうに考えることは、そのまま「生きる」とはどういうことを身体を通して観取することである。この自然とは、決して対象としての自然ではない。あえて言ってしまうえば、意識する意識しなにかかわらず「いのち」として息づいている力のことである。そういうことの重さが、「エチカ」からも、「正法眼蔵」からも読みとれる。スピノザは一七世紀のオランダに生き、道元は二三世紀の鎌倉時代に生きた。いずれも、世の中、世界のあり方について深く考え、さまざまな疑問を投げかけた。決して多くはないが、親しく信頼を寄せる人たちとの繋がりに支えられていた。スピノザは、社会から異端者としての生活を強いられ恵まれた立場ではなかったが、自身の生き方に誇りを持って生きた。その信念において共感していた友人が、群集に虐殺されるという出来事もあった。そのときの衝撃や憤りを通して、人間というものについて、深く思いを致すところがあっただろう。道元は、武士の力が定着していくなかで、権謀術数渦巻く貴族政治の圏内に生をうけた。高い教養を身につけつつもそこに世の矛盾を感じ取り、さらに幼くして母を失ったことでいっそう無常観を強くし、それらのことが彼の後の人生を大きく左右したことは間違いない。

何よりも、両者は優れた表現者であり、書き綴られた文言の端々に、人間が生きるということについて、真剣に思索するすがたがうかがえる。決して、分かりやすくはない。一方は、宇宙とそのうちに生きる人間の観念を体系的に述べるために、科学的事実、幾何学的証明方法、そして直観を用いる。もう一方は、仏教の歴史に於いて幾重にも蓄積されたさまざまな見解を、自らが体得した自覚的境地において、改めて表現し直そうとしている。それらは未開拓

の表現手法であり、いきおい難解なものとならざるを得なかった。

「エチカと正法眼蔵をめぐって」と副題に示したように、すでに高く認められた哲学書あるいは思想書としてのそれらを念頭に置きつつ、そこにある共通のキーワードともいえる概念について、少し距離を取りながら考えようとした。したがって、本書はそれぞれについての専門的研究書ではないし、それを行うだけの力もない。浮かんできた大切だと思えることがらを、ともかく書き留めておこうとしたにすぎない。

これを書いていて、しきりにある映画作品のことが気になった。黒澤明監督の「生きる」である。癌のために余命少ないことを知り絶望に陥った主人公が、あることをきっかけに、腹の底から湧いてくる力を自覚しつつ、新たに生き始める。自ら幾多の困難に立ち向かい、精一杯の人生を生きたことを胸にかみしめ、その成果の一つでもある公園のブランコに揺られながら、大きな喜びのうちに、ひとり静かにことされる。「いのち短し恋せよ乙女、紅き唇あせぬまに……」。そのとき彼の口ずさむメロディが、もの哀しくもありまた、「いのち」、自然の大きいなる力を存分に生かすきってほしいという訴え、願いとなつて、いまでも響きつづけている。

大いなる自然を生きる―エチカと正法眼蔵をめぐって―

目次

まえがき..... i

第一章 自然と生命..... 1

一 自然 64

(1) 根源的自然 1

(2) 生命のリズム 4

(3) 自然との一体化としての死 6

(4) 自ずからのこと 8

(5) 神あるいは自然 11

二 生命 14

(1) 生命をもって生きる 14

(2) 生命の自覚 16

(3) 死を生きる 18

(4) ほとけのいのち 20

(5) 生命活動のすがた 22

(6) 生命のはたらき 24

第二章 身体を生きる..... 27

一 身体 27

第三章 自己を生きる……

一 自己 47

(1) 自我と自己 47

(2) 仏教の自己 50

(3) 自己と他己 52

(4) 自己が自己に逢う 54

(5) 自己の本性 57

二 善と悪 59

(1) 意志 59

二 欲望と衝動 37

(1) 渴愛・妄執・欲望 37

(2) 欲望への自覚 39

(3) 欲望を生かす 41

(4) 欲望の真実 43

(1) 触るものと触られるもの 27

(2) 流れる身体 29

(3) 尽十方界真実人体 31

(4) 身体の本質 34

- (2) 業 61
- (3) 諸悪莫作 63
- (4) 倫理的な企て 66

第四章 生きることのすがた……………

一 実体 69

- (1) 実体という問題 69
- (2) 空の思想 71
- (3) 実体主義の否定 73
- (4) 実体としての神 76

二 真如と相 78

- (1) 実体と属性 78
- (2) 考えるということ 82
- (3) あるがままにあること 86
- (4) 諸法実相 89

第五章 生きることの自由……………

一 偶然と必然 93

- (1) 偶然ということ 93

第六章 永遠のいまを生きる

二	永遠	127
(5)	神の無限性	125
(4)	いまと無限	123
(3)	無限の宇宙	121
(2)	驚異すべき無限	119
(1)	宇宙の果て	117
一	無限	117
(2)	偶然を生きる	96
(3)	必然性から見る	98
(4)	縁起	100
(5)	解脱	102
(6)	自由	105
二	完全と不完全	107
(1)	不完全なるもの	107
(2)	美の発見	109
(3)	未完の終	112
(4)	完全の意味するもの	114

(1)	永遠とは	127
(2)	無限なるいのち	130
(3)	永遠のいま	132
(4)	永遠の相の下に	136

参考文献

あとがき